

■ 編集だより

編集後記

平成18年7月より本誌編集委員に加えていただいてから早1年近くが経とうとしている。正直なところ、それまで私自身が本誌の熱心な読者とは言えなかったところに、このような話をいただいたので、当初とまどいも大きかった。かなり若い頃に本誌に症例報告を投稿し、あっさりトリジェクトされた経緯も手伝って、私の中では、本誌は長編の重厚な原著がぼつりぼつりと散見される以外、精神神経学会総会の記録集というイメージが強かったことは否めない。

しかしながら、編集委員会に出席するようになって、これまでの認識は無知以外の何物でもないことを思い知った。まず最初に、編集委員会での各委員の徹底した、そして真摯な討論の姿勢には感動すら覚えた。各委員は、時間をかけて担当原稿を読み込み、あたかもわが教室の論文を仕上げるがごとく懇切丁寧にレビューしている熱意が討論の中でひしひしと伝わってくる。直接担当していない委員も、委員会当日に各原稿のレビューに対して熱心な討論を繰り返す。このようなプロセスを経て誌上に発表されるがゆえに、本誌論文の質が高いことは必然と思われる。そのような目で過去の本誌論文を読み返してみると、実に素晴らしい論文が並んでいることに改めて気づかされる。

さらに、原著だけではなく、総説、精神医学の潮流、症例報告、会員の声などの新たなジャンルの追加にも意欲的に取り組まれており、専門分野に偏らない総合精神医学雑誌として、ますます充実していくことが期待される。近年、サブスペシャリティごとの精神医学関連学会が少しずつ集束傾向にある一方で、精神神経学会総会の充実ぶりも著しいと思われるが、本誌も精神科医にとっての真の総合誌へと確実に変化しつつあることをまさに実感している。世界の中でも American Journal of Psychiatry に次いで長い、百年以上の歴史を有する精神医学雑誌である本誌の編集委員を担当する機会に恵まれ、私自身が精神科医としての基礎的素養を磨く修練の場として位置づけて、日々研鑽に努めたいと考えている。

ところで、今年は、札幌で開催された第54回日本精神神経学会総会（1957年7月）において、当時の北海道大学・諏訪 望教授と大阪大学・佐野 勇助教授が「精神疾患の薬物療法」と題した宿題報告を行って、ちょうど50年目の年に当たる。この報告を境に、日本でも統合失調症に対するクロルプロマジン使用が一般化したと聞いている。薬物療法の導入によって、統合失調症の治療が革新的な変化を遂げたとも評されるが、お二人のそれぞれ30ページを優に超える重厚な宿題報告論文（本誌59巻第12号、60巻第1号）を読み返してみると、その緻密で慎重な評価や卓越した先見性に改めて感銘を受ける。諏訪先生は、クロルプロマジンの効果を情動の調整が病像改善の出発点になると表現され、佐野先生は、薬物によって間接的に患者の「存在」に胚胎している健全な反応準備状態、共鳴能力、自然表出、精神力動が“entfalten”しやすくなり、結果として治癒傾向（Heiltendenz）を高め、社会復帰（Resozialisierung）に役立つことになると表現されているのは印象的である。かくの如く、本誌は、精神神経学会総会の記録誌としても、当時の息吹を現代に橋渡しする貴重な資料と言えるであろう。

久住一郎